



## 春秋覇者の時代 (晋の文公)

5月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年5月1日(月)

春秋諸侯の中で最も波瀾に富んだ生涯を送った人は**晋の文公、重耳**(BC636～BC628 在位)である。19年の亡命生活、国から国への流浪の歲月であった。ついに覇者となりえたのは、**文公その人の人徳と運の強さ、そして特に側近の人々の力が大きな要因**であった。

43歳の時暗殺を逃れて、母の里である狄に逃れて12年、そして齊へ向けて再出発した。先ず衛に立ち寄り、途中空腹のあまり農夫に施しを頼んだところ、彼等は土器に土を盛って差し出した。思わず怒鳴りつけようとしたところ、側近が「土をもらうとは、やがて領土を受けるとの吉祥。ありがたくお受取り下さい」と言った。

齊では桓公が歓迎してくれて、腰を落ちつけたが翌年桓公が没したのでまた出発した。

一行はその後、宋へ立ち寄った。宋の襄公は楚国と戦って苦杯をなめ、彼自身も泓水の戦いで手傷を負っていた。しかし、**重耳の器量**を承知していたので、国君に対する礼をもって、一行をもてなした。

かくて一行は宋を離れ南方の雄国楚へ向かった。

楚では、成王が賓客の礼をもって手厚くもてなしてくれたが重耳は返礼をする余裕はなかった。

そこで親しくなった成王に「将来やむなく、王の軍と平原で戦う羽目に陥りましたなら、そのときには、わが軍は90里だけ後退いたしましょう」と言った。

楚で数か月经った頃、秦の穆公から招請の使者が来た。

成王は重耳に、「晋と楚は遠く離れているが、晋と秦は隣合わせ、しかも秦君は名君で聞こえています。これを機会にぜひ行かれるとよい」とすすめ、重耳を手厚く送り出した。

秦の穆公は重耳一行を歓待し、晋でも内紛が治まり重臣たちが秦に来て帰国を要請してきた。秦の穆公も直ちに軍隊を動員して重耳の帰還を援助した。

晋の側も軍隊を繰り出したが、晋では重耳帰国のことは暗黙の了解事項となっており、これに反対するものはわずかであった。

国外亡命19年、すでに62歳になっていたが、彼の帰国は国人多数の支持を受けた。

参考：(司馬遷史記、晋世家、徳間書店)